

想いを綴る心の旅

「アメニティーフォーラム」といって。

福祉の研修会は多くの場合、極めて辛くさい。どうしてこうつまらないのか、ずっと考えていた。明るく福祉を語るも真剣に考えていないように見える、と思ってしまうからだろうか。福祉の専門家を講師とし、より福祉の専門性を高めなくてはならないという観念からだろうか……

福祉を多様な切り口で、環境もサービスも流の場所でも楽しく考えたい！そういうことを思い立ったのが16年前の1996年のこと。今となつては滋賀の2月の風物詩となった「アメニティーフォーラム」のことについて、今回は書いてみたい。

このフォーラム、幾つかの特徴がある。それは以下の6つである。

- 1) 実行委員会方式であつて、立ち上げ当初の実行委員が今も継続している。
- 2) 参加費が高い。(他のフォーラムと比べ桁違う)
- 3) プログラムが早朝から深夜まで組まれている。(例えば、朝の8時から夜中25時半まで)
- 4) 講師陣が1000人を超える。
- 5) 口コミだけで、参加者が増えている。(開始当初250人から、ここ数年は1500人以上の参加)
- 6) 展覧会や映画会、コンサートが同時並行して行われている。

天井が高くて、シヤンリアがあつて、看板もあつたりきりではない、スリットした綺麗なやつ、そういう会場がいい。福祉の現場の人たちもサービスを提供する側なのだから、自身も流のサービスを受けることで流のサービスを提供できるのではないか。こんな風な仲間たちとの話しか、この「アメニティーフォーラム」は始まつていった。こんなやり方で上手く行くのかという不安なまじつたくなかつた。最初の数回はそれぞれの年賀状をひっくり返しながら、フォーラムに参加してくれそうなのに案内状を送つた。

当時は、入所施設に我が子を預けるか、それとも、支えるサービスもないままに自宅で我が子と生きるか、どちらかを選ぶ時代だった。そんな現状の中で、「地域で育ち、地域で生きる」こ

とを支える福祉サービスが生み出せないものかと考え、独自のやり方でサービスを提供している人たちが、少ないながらも幾つかの地域で頑張つていて。この実践を日本に広く紹介し、制度として立ち上げ、全国に普及していくことがこのフォーラムのミッションであつて、その目的は今も変わらない。

第1回(1996年)は、アメリカとカナダからゲストを迎えた。当時、「レスパイトサレバ」が日本に紹介された頃で、このサービスこそが障害者が地域で暮らすために必要なサービスであると考えられていた。親の休息こそが、障害のある我が子と一緒生きる上で必要だと考えられていた。役所に行って面倒な手続きをせずに、電話一本でサービスが24時間いつでも必要な時に利用できる仕組みが、レスパイトサービスだった。その本家のアメリカとカナダから講師を招き、日本に紹介しようと考えた。フォーラム当日は、2500人の人たちが全国から集まり、一泊二日の合宿型の勉強会は、まずまずの成功を収めた。

一般の障害者福祉のフォーラムが低額の参加費で行われている中、このフォーラムは桁違う参加費といつてもあつて、「楽しい」という声を聞きながらでもそれ以上に、「派手だ」、「参加費が高い」と厳しい批判も受けた。なぜ、立派なホテルでフォーラムをやる必要があるのか。今の時代から考えると、驚く人も多いと思うが、90年代半ばは、そういう風潮だった。

あれから16年の歳月が流れた。この間、現場で働く人たち、当事者、行政関係者、研究者、政治家など様々な立場の人が参加し、忌憚なく意見を交わしてきた。時として対立関係にあつた人々も、会場内に漂う期待と熱気のためか、相手を責めることもなく楽しい雰囲気でも語り合ってきた。情報交換に留まらず、友情が芽生えることもあつた。障害のある人が地域の中で市民として生きるには何が必要かと、皆真剣に語り合つてきた。回を重ねるにつれ、いわゆる講演やシンポジウムという勉強会だけでは何かが足りない、人の暮らしには芸術文化も重要な要素であると思ひ至るようになった。そして、新しい副音声と字幕をつけたバリアフリー映画を上映する「びわこアメ

ニティー映画祭」(第9回から)や、アールブリュット作品等々を展示する美術展(第10回から)、「コンサート」なども同時に開催するようになった。ちなみに、昨年の第15回大会は、講師が1300人を超え、国内外の美術関係者にも講師として参加していただいた。早朝から25時までという無茶苦茶なプログラムにもかかわらず、不思議とエスケープする人はそんなにいなかった。

私は毎年、このプログラムの原案(たまたま台本)を作るという役割を担っている。片手に携帯電話を持ち、大まかなプログラムを立てながら講師に電話をかけていく。この作業がなかなか楽しい。沢山の人が満足して貰うには、どのようなテーマに、どのような講師の方に来ていただいたら良いのか。今の自分が何を考えていて、自分の時代を読む力を試されていくような気分になる。講師の人たちには、「とにかくスケジュールを空けておいて」と言いながら、日程を押さえていく。了解をもらつた講師陣の名前を机の上に並べながら、何度もパズルのように組み替えながらセッションを練り上げる。そうやって、1300人を超える講師陣のプログラムが出来上がっていく。

「びわこアメニティー映画祭」を開催しようとなり、友人の山上徹二郎(株式会社シグロ代表)に協力をお願いしたところ、二つ返事で返つて来た。彼は水保病のドキュメンタリー映画を土本典明らと撮り続けてきたが、劇映画「絵の中の僕の村」も手掛り、ベルリン国際映画祭で銀熊賞を取るなど、幅広いジャンルで映画作りを行つてきたプロデューサーである。その彼から提案があり、新しい副音声と字幕を入れた「バリアフリー映画」を作ろうということになった。見えない人や聞こえない人も楽しめるこの映画は、私たちにも映画の新しい鑑賞方法を教えてくれることになった。娯楽共有できない社会のあり方は間違つているのだと、アメニティーフォーラムのプログラムを作つていく上で欠かせないものつとになった。

特徴の一つとして上げたように、アメニティーフォーラムの参加者は、ここ数年、1500人を超えている。大津プリンスホテルのコンベンションルームと客室はすべて貸し切りとなり、人で溢れる。2500人が始まつたこのフォーラムは、毎年口コミで拡が

ていき、ついに2月の滋賀の風物詩となった。

2004年、宮城県知事だった浅野史郎さんが、「入所施設解体宣言!」をこのフォーラムで行い、又コミの対応に追われたことがあつた。その後、「入所施設解体フォーラム」だとも言われ、一部の人たちの反感を買つたこともあつた。昨年度は、障害者割引郵便事件で無罪判決となつた村木厚子さんを、「お帰りのさい」と参加者が拍手で迎えた。村木さんも「たいたい」と笑つて手を振つた。本当に色んな出来事があつた15年だ。

今回のスタートは、成人細胞白血病を引き起こし、骨髄移植を受け静養をしていた浅野史郎さんと、盲聾という障害を持つ福島智(東京大学教授)さんの対談から始まる。

人が物事を継続するために必要不可欠なのは「楽しさ」というキーワードだと思つている。楽しさがない思考は、人を包み込まない。村木さんや浅野さんの登壇に楽しさを持ち込むのは、従来型の考え方であれば禁忌なのだろう。お二人とも深刻な事態に遭遇したのだから。しかし、このこととはお二人自身が払拭してくれた。

このキーワードがさらに試されるのが、今回のアメニティーフォーラムである。原子力発電所の事故により、また日本が被曝してしまつたこの時代に、福祉に何ができるのか、これがテーマである。議論が必要、それは誰もが思つていながら、実際は対立構造しか生まれていない状況である。そのような中、いつもの雰囲気を保ちながらも真剣に議論ができればと思つている。

「アメニティーフォーラム」・・・1996年からスタート。障害者の地域生活を推進していくために、全国的なネットワークを作ろうと目的に、毎年2月に滋賀県大津市で行われている。全国から、1500名を超える人達が参加し、今回で16回目を迎える。15回までの講師陣の延べ総数2300人あまり、参加者延べ総数1万8000人あまり。

